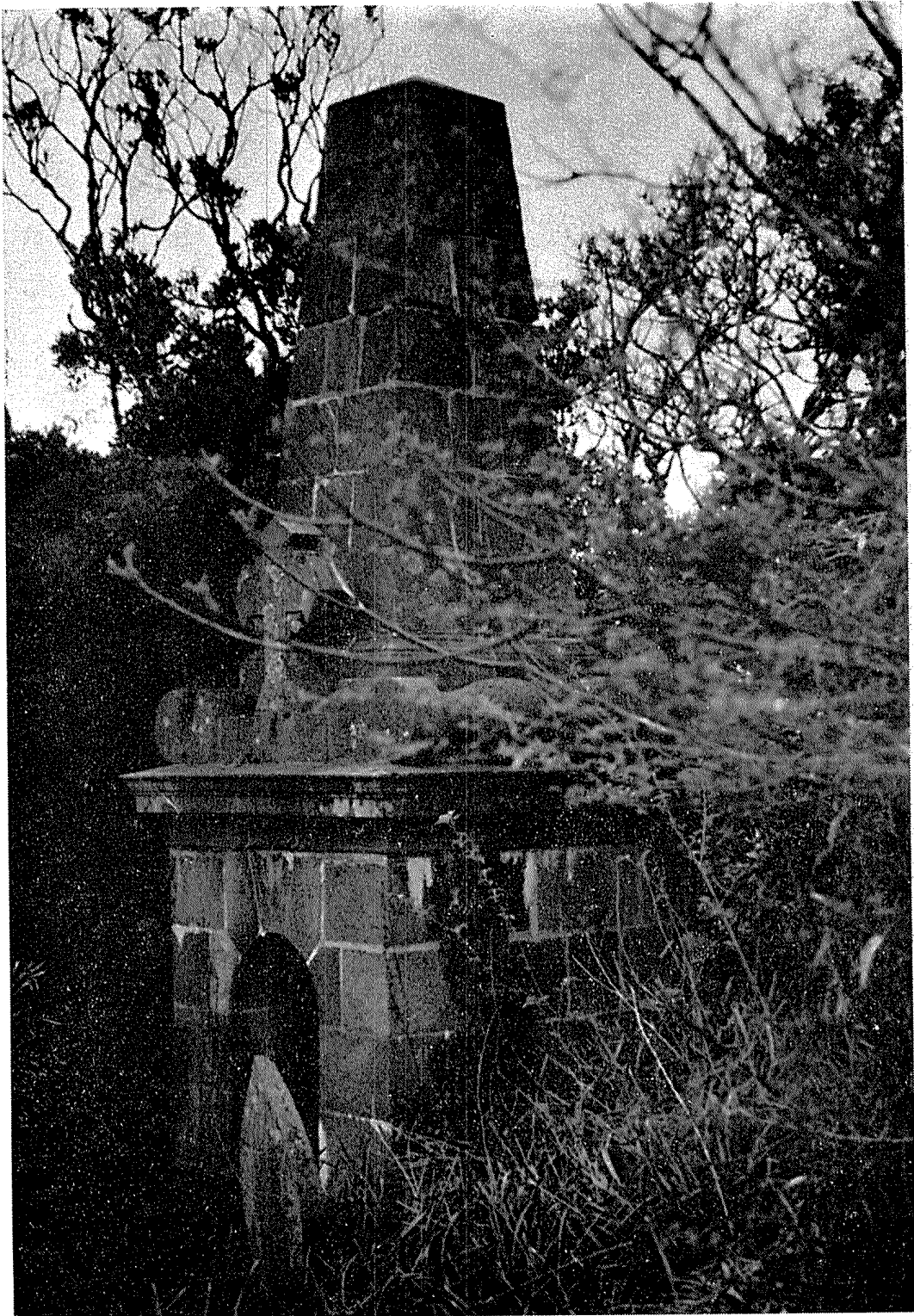


Title	明治文化史の一頁：二つの海難事故を中心とする小考
Sub Title	On the unknown documents about the sea accidents : one chapter in cultural history of Early Meizi Era
Author	浅子, 勝二郎(Asako, Katsujiro)
Publisher	三田史学会
Publication year	1965
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.38, No.2 (1965. 10) ,p.1a(155a)- 24(178)
JaLC DOI	
Abstract	The present article is founded upon the manuscripts which I have recently discovered in Iruma (入間) Izu. They are the reports of sea accidents in the begining of the Meiji era. By this record we can fortunately learn of the careers of two important persons who made great contributions toward cultural development in modern Japan. One of them is Masatsuna Okuno (奥野昌綱). We can read his life and work in the record of shipwreck of the Kanrinmaru (咸臨丸) in 1868. He was a vassal of Kugenhoshinno (公現法親王) who was the highest priest of the shrine dedicated to the Shogunate family. At the time of Meiji Restoration, Kugenhoshinno escaped from the pursuit of the Imperial army and went to Sendai leaving his vassals. As a faithful servant, M. Okuno tried to follow his master and embarked the Kanrinmaru, a battleship belonging to the Tokugawa (徳川) party, to go to Sendai. But the Kanrinmaru was stranded on the coast of Shimoda. This unexpected incident seriously affected his later course of life. After a long wandering he made up his mind to become a Christian and devoted himself to the missionary work all through his life. He is to be rememvered as one of the first translators of the Holy Scriptures in Japan. The other notable person appearing in these documents is Antoine Liccioni. He died as a passenger of the Nille, a French steamer, which shipwrecked near Iruma in 1874. We can find his deed in the record of that sea accident. He had played a leading part in a dockyard at Yokosuka which had been established by the Tokugawa Government. We can not underestimate Liccioni's contribution to the development of shipbuilding industry in Japan.
Notes	写真:二一ル号遭難記念碑
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19651000-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.



ニール号遭難記念碑 一入間 海蔵寺一

明治文化史の一頁

——二つの海難事故を中心とする小考——

浅子 勝二郎

はしがき

二つの海難事故というのは、明治元年（一八六八）八月二十九日の咸臨丸伊豆下田漂着の事件と明治七年（一八七四）三月二十日伊豆入間における仏蘭西郵船ニール号の遭難事件である。

叙述の便宜上以下まずニール号遭難記念碑の建設をめぐる、ついで彰義隊潰滅後仙台に逃れた輪王寺宮（公現法親王）のもとと近侍の士奥野昌綱が、榎本釜次郎麾下の咸臨丸に乗じて北上を志しながら、同艦が難航して伊豆下田に漂着したため、ひそかに上陸して駿河に奔り、転々としてついに横浜に出て基督教信徒となり、和漢の学才をもって新生して、日本における聖書翻訳史、基督教伝道史上に大なる足跡を印するにいたる径路を概略記述するつもりである。

一

筆者はさきに「近世庶民芸術・文化に関する研究⁽¹⁾」において、近代の漆喰彫刻の名人「坊者天祐」こと入江長八の作品を、多くその壁面に遺している伊豆戸田の松代・太田両家の和洋折衷——というよりは擬洋風の建築（前者は母屋、後者は土蔵）に関して

「戸田というところがプチャーチン塔乗のディアナ号が、安政元年（一八五四）下田地方を襲った激震、大海嘯のために沈没して、翌年幕府の好意でいわゆる君沢型といわれる小型帆船ヘダ号を建造した当の場所で、そこには時運にさきがけた新風がそよいでいたような気がする」と記したが、戸田はまたヘダ号建造の際造船世話掛として早くも造船を実地に学び、のち文久二年（一八六二）造船技術修得のため榎本釜次郎らとともに和蘭に留学した近代日本造船史上逸することのできない上田寅吉を生んだところでもある。上田は戊辰役の際は榎本に従ったが、のち草創期の横須賀製鉄所にはいつて腕をふるっており、ニール号遭難記念碑の建設にも何等かの関係あるやを想像せしめるものがある。

筆者は昨年暮たまたま入間でニール号遭難に関する資料⁽²⁾を発見した。この資料を活用することによって記念碑建立の事情がやや明かにされるのではなからうかと思う。

二

ここで伊豆の気象関係の事項をしばらく挾^{さしはさ}もう。

伊豆西海岸は冬季西の季節風の強いところである。長津呂測候所^(静岡県賀茂郡南伊豆町石廊崎所在)の昭和二十六年から三十五年までの十年間の統計によれば、年間平均風速は七・一米であるが、十二月・一月・二月がとくに強く、それぞれ八・四米、九・三米、八・六米を示している。また西風の百分率は年間平均二十五パーセントで、十二月・一月・二月はそれぞれ四十二、四十七、三十七パーセントと他に比して断然高くなっている。

この極めて大雑把な統計だけで、海上遭難事故の発生を云々することが早計であることはいうまでもないが、とくに帆船時代に伊豆半島西方海域における冬季季節風の時期の遭難事例を多く発見することができるのは必ずしも偶然ではないように思われる。

筆者はまず伊豆半島西部南部に現存する二、三の民家の遺構と同地域若干の部落の防風波のための構宮の一端にふれて見たい。

西海岸松崎(賀茂郡松崎町大字大沢)に依田敬一氏邸⁽³⁾がある。同家の祖は天正十年(一五八二)武田氏滅亡後逃れて現在の地に土着したと伝えられており、現当主は第十四代目の由である。

さて現在同家に残されている棟札に⁽⁴⁾

宝曆九己卯秋后七月十七日洪水門牆長屋一時崩流本宅倉廩幸雖無恙土地卑湿有水恐也故計地形東西二十間余去水辺南北十有五間余築石三面高丈余地成屋宇不日成也宝曆十庚辰年九月二十六日棟上

豆州那賀郡大沢村依田氏六代孫

善右衛門保高

嫡子 吉太郎

大工棟梁 同州桜田邑 彦七

宝曆十一年己歲仲冬十五日大般若祈禱之次万法山主天国恵均記焉

と記されており、現在の母屋、土蔵(現在母屋の北側に三棟の海鼠壁の土蔵が並んで、その中央の味噌蔵とよばれている蔵)が少くとも宝曆九年(一七五九)以前に建てられたものであることが明かである。もっとも後年部分的改造、増築が行われていることは、創建が古いだけに当然といわなければならない。

ところで依田家の母屋は間口十間、奥行五間の平屋建、屋根寄棟造の本瓦葺さらにそれに棧瓦葺の庇をつけた堂々たる建築で、鎌倉期の和様建築を思わせるものがある。木割雄大―大黒柱は径一尺八寸ほどの檼材、それを中心として田の字形に立っている柱は、平均九寸角の同じ檼材で太い梁桁をがっちり支えており、その上に重い本瓦葺の屋根を載せている。

母屋の外部は腰の部分は海鼠壁、上壁は漆喰塗、小壁には平瓦を豎に貼り、その目地を白漆喰塗とし、さらに漆喰は軒裏の檼にまで及び、つまりすべての露出している部分を総漆喰塗としており、また要所には格子に銅板を打ちつけた防火戸を立てて完全な防火建築としている。

なお海鼠壁は防火に役立つばかりでなく、風雨によく堪えるところから、各地の土蔵の腰壁などの部分に好んで用いられている。依田家の母屋が完全な防火建築になっているということは、とくに冬期西風の強い地方として同時に防風の役割をも十分に果たしてきたことを意味するものである。

そこで依田家のように完全な防火防風の総漆喰土蔵造りの建築を構える資力のある向々が、まずはじめに泥工たちの得意先となったであろうし、かれらは費用を惜まず仕事に贅を尽すことも許されたであろうから、技を磨く機会にも自然恵まれたと考えてよい。若き日の名工入江長八も松崎から婆沙羅峠を越えて遠く稻梓まで仕事に出たと伝えられているが、おそらく落合部落の旧家あたりがその仕事場ではなかったろうかと思われる。富裕な旧家が庶民の芸術家を育成する温床であつたろうことを推想するのは無理であろうか。現在依田家の西側の蔵の妻の部分に、伝長八作の同家の紋所橋の見事な漆喰彫刻がある。

さてつぎに、伊豆西海岸の二、三の部落に現在見られる防風波の構営について一言しよう。

まずニール号遭難事故のあつた人間の部落は海面からかなり高いところにあり、波の押し寄せるおそれのある比較的低い部分つまり入江の奥まったところには民家がほとんどなく、美しい景色を見下しながら入江にくだる斜面に海に面して高い石垣が築かれていて、その蔭に平屋建の民家が立ち並んでいる。面白いのは波のおそれのまずない入間に築かれたこの石垣は、同じ西海岸の中木の部落におけるような防風波壁ではなく防風壁であることである。入間の石垣は中木のにくらべてあまりいかめしくないのに容易に気がつく。石垣を抜けて部落から海岸へ道路が通じているが、この短い墜道様の

部分には中木などの防風波壁に見られるような、波を防ぐために頑丈な板戸を立てる工夫が全くなく常時開いたままである。入間の石垣は完全な防風壁である。

入間のすぐ南に中木の部落があるが、この部落は海に臨む極めて緩やかな傾斜地に形成されているので、石垣はまことに物々しく、さらにその上に胸壁を重ねているものもあり、中木郵便局の如きは宛然城壁を思わせるものがある。民家のうちには波の方向と直角につきり波打際に沿って走る道路と平行に通路に緩傾斜をつけて自家の門前に導くように工夫したり、あるいはまた平常は板戸は外して石垣に開けられた道路になっているが、万一の場合はそこに厚い板戸を嵌入して一続きの石垣に化するように両断面に深い溝を彫った太いコンクリートの柱をつくりつけなどしているものもあって、入間の場合と比較して同じ西の強風に対応するにしても、立地条件によって如何にその防備態勢がちがったものになっているかが理解されてまことに興味深いものがある。

下田の東南四キロのところに戸数三四〇ほどの半農半漁の町須崎がある。ここは風波の荒むところで、とくに南からの風イナサ・ヤマセが強い。

部落は北側に低い丘を背にした狭い斜面に位置し、前面に防風波のための石垣と胸壁を築いている。またこの石垣に沿って波打際三、四米の高さに幅二米ほどの部落唯一の平坦な道路が通っているが、各戸は斜面につくられているのでこの道路と所々に開かれている石の階段を利用しなければならない。この平坦な道路ができる前には、高い石垣の内側につくられている狭長な庭づたいに往来したということである。現在部落の一部にその名残を見ることが出来る。

須崎では石の階段をガング(雁木の証り)とよんでいるが、これは雪国の町屋で庇を張り出して、その下を通路とするものや瀬戸内などで船着場の階段のある桟橋がこの名でよばれているのと同じの論ということになる。筆者は須崎で自然石から刻出したつまりつくりだしの階段を見たが、風波の強さを思い知らされる思いがした。

須崎の西はずれに土屋芳太郎邸がある。同家は古く回漕業を営み、その持船は江戸から西国方面まで活躍した。同家の茶の間から二階に通ずる階段の下は戸棚になっていて、その板戸の裏に「元治元子初春日 土屋伝兵衛」と記されており、棟木の墨書銘や棟札とちがって書き残されている場所が気にならなくもないが、少くともこの墨書が同家の現在の母屋の建築年時を示すものと見て差支えないと思う。この建物も松崎の依田家のように部材太く見るからに堅牢な感じで、屋根瓦も漆喰でいいねいに押えている。とくに降棟は白くだりむねい漆喰の間から黒い瓦がのぞいているといった観がある。同家にはまた母屋と並んでやや奥まったところに洋風を加味した屋根瓦葺の石造の蔵が残っており、由来「和蘭屋敷」とよばれていたことである。もしこの蔵が母屋と同時の建築であるとすれば、初期擬洋風建築の遺構として貴重な存在となるわけであるが、なお後考を俟たなければならない。

三

伊豆西海岸に妻良子浦の良港があり、巾着形の湾の南北に向きあって両地区が並んでいる。ここは帆船時代風待港として繁昌したところであるが、現在妻良区に保存されている「永代帳」なるものに、安政二年長崎に開かれた海軍伝習所に赴く第一回伝習生を乗せた昌平丸が、風のため遠州灘で難航し妻良に入港したことが記されている。九月八日のことである。この帳簿には「御乗組之内御病人等有之候に付」と見え、伝習生の一人浦賀奉行所与力中島三郎助の病気をまず入港の理由としているが、すぐ続いて「順風次第御出帆と極候」と記しており、十三日順風を待って出帆しているので主目的は風待ちにあったと見て差支えない。なお「御乗組御役様御姓名」には勝麟太郎や矢田堀景蔵・中島三郎助・佐々倉桐太郎・春山弁蔵などの名が見えている。

ところで、將軍家茂は文久三年の再度の上洛には海上をえらび、十二月二十七日に翔鶴丸に乗って同夜は船中に一泊

し、翌二十八日に品川を出帆している。同日は浦賀に滞留し、二十九日に浦賀から下田に着き、下田で正月を迎え翌元治元年（一八六四）一月二日風に遮られて小浦へ入港した。その間の事情は須崎村村役人田中六兵衛の手記「御上洛覚書」⁽⁶⁾によってこれを明にすることができる。また子浦にも名主才兵衛が領主旗本瓦林清太郎に宛てた届書や同人の手記、他家に伝わる記録があったらしいが、この方は散逸してしまっており、現在転写を重ねたものが伝えられているにすぎず、例えば御供付衆姓名のところでも、才兵衛の手記には正しく奥医師竹内、滑川院と記されていたろうと思われるのであるが、そこが奥医師竹田、滑川院となっているなど、いささか信憑性を欠き、史料としての価値の乏しいものであることは遺憾である。そこで田中六兵衛の「御上洛覚書」によって当時の模様について少しく考察したいと思う。

將軍家茂の江戸出航に先だって、二十六日には浦賀奉行から須崎村役人に対して達しが出ている。浦賀奉行というのは享保五年（一七二〇）に船改番所が下田から浦賀に移され、自然その所管奉行の名称もかわったわけで、江戸湾出入りの船舶、大坂奥羽間の廻船の改役に任じたものである。さて將軍の海路上洛について、覚書に「地方は御代官江川太郎左衛門様御掛り浦手は浦賀奉行様御掛り」と記されているように、それぞれ陸海の責任担当を定めている。もっとも江川太郎左衛門はすでに安政二年に歿し子篤之亟の代になっていた。

さて覚書に御召軍艦とはっきり区別して「上様御座船」の文字が見えているので、下田湾内巡行には二十七日にわざわざ浦賀から送られてきた明星丸か小嵐丸かのいづれかが使用されたのではないかと思われる。また御座船について「子年正月五日西風に相成出帆」とも見えているので、將軍が下田を去ったあとで帰航したことがわかる。

將軍の乗船は覚書では御召軍艦と記されているが、子浦の記録には御座船と見えている。また扈從の艦艇は下田までは順動丸・朝陽丸・觀光丸・大鳳丸・蟠竜丸・八雲丸・広運丸・千秋丸・千代田丸の九隻であるが、子浦では広運丸、千秋丸、千代田丸の三艦の姿が見えない。

覚書によれば三十日には全乗組員を上陸させ同夜海善寺で年取りつまり除夜の儀を行い、さらに盛んな酒肴をもうけて元朝の祝儀も執り行っている。これらの事実は下田が江戸の城下と全く同様であり、またそこに至るまでの海は江戸の領海とでもいったような觀念のあったことを物語るものとしてまことに興味深いものがある。

また覚書についている「御道具之覚」には「紫縮緬袋入御守刀と相見え申候忝腰、劔付御鉄砲五拾挺余」などの品々も見え、非常時の雰囲氣を伝えているのは流石である。

四

筆者は昨年暮「ニール号遭難始末記」(仮称)とともにさらに二葉の図写——「明治七甲戌年三月廿日夜仏国郵船ニール号当村地先字亀甲沈船溺死骸埋葬地所略図」と「甲戌三月廿日夜仏蘭西ニール号沈船溺死骸埋葬地所略図」——を発見した。両図の作成の時期は不明であるが、後者には死体発見の日時、場所が明記されており、本事件が如何に異常な関心をもたれていたかということを雄弁に物語っている。本図においてはリッシオーニ(後出)はとくに横文字 (Liccioni) で示されており、また本図によって埋葬地区一番の仏蘭西人——リッシオーニその人であるが——が入間に流れついたのは三月二十一日つまりニール号遭難の翌日であり、死体の大部分は三、四月(五月に例)に収容されているが、ただ三十番は亥年——明治八年——に漁師に引き揚げられ(始末記に神奈川県馬入から廻送されたと見えるものか)最後の三十一番は子——明治九年——二月に妻良から移されたもので、ともに「骸」とのみ記されているので、遺骨となって拾われた二つの特例と見ることができると同時に、両図の作成年時を明治九年二月ころと推定する可能性も生ずるわけである。

なお始末記に遭難者中身元の明かなものとして「只三月二十一日ノ朝漂着シタル一人之レハ我ガ海軍省ノ雇聘ニ係ル横須賀造船所技師ト判明シタルノミニシテ」と見えているのは、実は横須賀造船所の雇入れ仏蘭西人で、当時船具頭目の職

にあったアントワーヌ・リッシオーニ (Antoine Liccioni) で、その弔魂碑が現在入間海蔵寺の墓地にニール号遭難記念碑と並んで立っている。ニール号遭難記念碑にはその基壇の部分の正面に「A LA MEMOIRE DES NAUFRAGES、DE NIL」(「ニール号遭難」の記念として) と刻まれており、リッシオーニの弔魂碑の碑銘は「ICI REPOSE ANTOINE LICCIONI DECEDE LE NIL LE 20 MARS 1874 AGE DE 32 ANS PRIEZ POUR LUI」(「一八七四年三月二十日、享年三十二才をもってニール号の遭難に歿したるアントワーヌ・リッシオーニここに眠る。人その冥福を祈りたまえ」) と読まれる。

ここでアントワーヌ・リッシオーニの事歴にふれておこうと思う。

慶応二年(一八六六)十月の調査にかかる「横須賀製鉄所雇仏人明細表」⁽⁷⁾によれば、もとマルセーユ港在勤海軍水夫頭目であったかれが、一八六五年十二月三日新に運用方頭目として月給八十弗で雇い入れられたことがわかる。かれは翌々明治元年には運転方頭目と職名がかわり、月額百弗に昇給している。⁽⁸⁾さらに一八七〇年製帆綱頭目から船具頭目に転じ月俸は百十弗から百五十弗になっているが、翌年四月結婚のため帰国を許され、旅費三百三十二弗五十四仙を交付されている⁽⁹⁾、また同年十二月十二日付けの「御雇入外国人明細表」に明治六年四月一日まで雇入れを延期しているリッシオーニ⁽¹⁰⁾を見る事ができるが、かれはやがて同年十月二十六日再び帰国の途についている。⁽¹¹⁾

然らばかれがニール号遭難の犠牲となったのは如何なる事情によるのであろうか。「横須賀海軍船廠史」第二卷明治七年紀^(一四)は

九月二十八日海軍省ハ曩ニ病死シタル本所雇仏人エリツソン及ヒ先年再雇ノ契約ヲ領シテ来航ノ途次我邦沿海ニ於テ仏国郵船「ニール号」ト共ニ沈没溺死シタル旧船具頭目リッシオーニヲ追悼シ其遺族ニ扶助料二百弗ヲ贈与セリ

と伝えている。かれは再雇用契約の上赴任の途、明治七年三月二十日ニール号の遭難に歿したのである。

ところでニール号遭難記念碑とリッシオーニの弔魂碑は、何時また何人の手によって建設されたのであろうか。筆者が

昨年暮発見した二葉の図写とくに三十一名の死体発見の日時、場所が明記されている「甲戌三月廿日夜仏蘭西ニール号沈船溺死骸埋葬地所略図」から判断すると、両碑の建設の年時は——同時に営まれたとしても——少くとも遭難者の最後の遺骸がおさめられた子二月すなわち明治九年二月以後と見なければならぬ。

ここに両記念碑の建設年時をもって明治九年（一八七六）以後ならんとする推定を支持するやに見えるものがある。それは現在ニール号遭難記念碑の前に建てられている弔魂碑である。この碑は本事件の処理にもっとも奔走尽力した足柄県属前田甲竜の撰文に成るもので、碑文はつぎのようなものである。

弔魂碑 葦山 前田甲竜撰

仏国郵船爾伊兒発香港將航横浜明治七年三月廿日抵豆州入間村瀕海其夜風浪大興触礁而覆不死者僅四人数日浮屍漂蕩至岸者三十一人葬于里中海蔵寺余奉命往檢其事萬里游魂將安盼依誠可悲也因書始末勒之磨石以慰其魂云

明治九年三月廿日建

さてこの碑は碑文によれば明治九年三月二十日に建設されたことになるが、この三月二十日の日付は必ずしもそのまま受取る要もなく、ニール号遭難の月日を便宜上録したものであろう。とにかく先にも記した如く本事件が当時異常な関心を喚びまた官民一体となって事態の処理に当った稀有な事例であっただけに、この弔魂碑はただそれだけではまことにささやかな、貧寒たるものであり、全く事態に不相応なものといわなければならぬ。かく見来って本弔魂碑を仏蘭西側の記念碑に副うものつまり副次的な意味を有するものであり、説明的なものであると解することはできないであろうか。

ここでリッシオーニが横須賀造船所に関係があったということ——遭難仏蘭西船に搭乗していたリッシオーニが横須賀造船所に関係があったといわなければならないかも知れない——が記念碑の建設と結びついてくるように思われるので、つぎに横須賀造船所を一瞥したい。

幕府は嘉永六年（一八五三）ペリーの来朝を機として、まず洋式造船技術・操練術の修得をはかるため、翌々安政二年和蘭海軍士官を招聘して長崎に海軍伝習所を開き、ついで艦船の建造修理の目的で同四年和蘭海軍士官ハルデス（H. Hardes）の指導のもとに長崎鎔鉄所の工を起し、万延元年（一八六〇）上棟式が行われ、名を長崎製鉄所と改め、翌文久元年四月落成した。この製鉄所がのち明治政府の手に移って長崎造船所となり、さらに三菱に払い下げられ三菱長崎造船所となって今日に及んでいる。今日その構内には創立当初の建築は全く見られないが、ともかくわが国最初の本格的な洋風建築が長崎に出現したことは注目し得る。

しかし長崎は西陲の地であり、その製鉄所の工場は海防の充実に添うには規模が小さく、幕府は元治元年（一八六四）時の仏蘭西公使ロシェ（Léon Roches）の斡旋により、当時上海で砲艦建造に従事中の仏蘭西海軍技師ヴェルニ（F. L. Vernet）に造船所建設を委任し、かれはひとたび帰国し翌慶応元年正式に招聘をうけ、さらに翌年再び来日して製鉄所の建設に当った。もっともこの製鉄所の補助工場として計画された横浜製鉄所は機関将校ドロートルの指導のもとに慶応元年八月竣工創業している。これが東洋最初の洋式造船所である横須賀製鉄所および横浜製鉄所の濫觴である。のち明治政府に帰して横須賀造船所となり、さらに横須賀海軍工廠となった。

ところでここにも現在創立当初の建築は見ることができず、「横須賀海軍船廠史」所収の写真によってわずかに石造・洋風木造・木骨煉瓦造の大規模な工場建築群の存在を窺い得るのみである。また船廠史には工場建築以外の集会所その他の石造・洋風木造建築を多く見ることができ、写真は鮮明を欠き、とくにこれらのうちの石造建築とニール号遭難記念碑を校合する便りの失われていることはまことに遺憾である。しかしはじめ横須賀製鉄所雇入れ仏蘭西人バステイアンが明治四年（一八七一）から二年にかけて関係した富岡製絲場の建築が現在ほとんど創立当初のままに遺されているので、あるいはここに何等かの手がかりが得られるのではなからうか。

さて横須賀製鉄所の創立当初の建築は初代建築課長レノ一の設計によって施行される筈であったが、かれは慶応二年一月横浜到着後罹病死去し、代って在巴里工部燈台局建築技手ルイ・フロランが二代建築課長として雇入れられることになった。⁽¹³⁾ 第三代はかれの実弟ワンサン・フロラン、第四代はジュウエットで、かれは明治七年五月一日から向う三ヶ月間の契約で雇入れられているので、明治九年と推定されるニール号遭難記念碑の建設にはあるいはかれの構想が働いているのではなからうかと思う。⁽¹⁴⁾

横須賀製鉄所の建設については、その地が江戸に近く、江戸並にその近傍の建設関係者は多くその工事に与り、新技術を得たことはいまでもなからう。事実明治四年造船頭となり、のち工部省営繕局長として建築行政を掌した平岡通義、幕府御用の棟梁の出であるが、横須賀製鉄所創設の際工事監督を命ぜられ、のち大蔵・工部・海軍の各省の技師を歴任し、宮内省・学習院・東宮御所などの建築に当った朝倉清一らの官僚技術者を生んでいるのも偶然ではない。要するに横須賀製鉄所は幕府の後世に対する最大の遺産であるとともに、日本近代建築史における意義は頗る重大なるものであるといわなければならない。⁽¹⁵⁾

筆者はさきに横浜製鉄所がドロートルの指導の下に早くも慶応元年八月に竣工創業したことを述べたが、かれはこれよりさき六月同所の船渠築造のプランとともに所用の石材二万一千五百箇の斫採を幕府に要求している。この間の経緯を船廠史から引用しよう。⁽¹⁶⁾

「…是ニ於テ委員(筆者曰製鉄所委員八名)ハ曩ニ品川砲台ニ使用セシ石材斫採法ニ準拠シ属僚ヲ小田原藩主大久保加賀守ノ封内相模国足柄下郡以西ノ各村ニ派遣シテ之ヲ調査セシメ其標品ヲドロートルニ示シテ品質ノ適否ヲ垂問セシニ石質堅硬能ク其用ニ適セリト答フ乃チ本日ヲ以テ其経費金二萬三千四百八十九兩強ノ下付ヲ請求シ七月二十八日幕府ノ裁可ヲ得タリ是ニ於テ石材斫出場所ヲ確定シ之ヲ加賀守ノ江戸邸吏ニ伝達セリ而シテ八月十五日以降百五十日間ヲ以テ其斫出方請負ヲ勘定所

用達藏田清右衛門ニ命シ直チニ受書ヲ差出サシム」

確定した石材斫出場所は品川村・石橋村・米神村・根府川村・江ノ浦村・岩村・真鶴村・吉浜村・門川村の九箇村である。

ところでニール号遭難記念碑のある入間海蔵寺の住職大野玄峯師によれば、記念碑の用材は真鶴から運ばれたと伝えられていたことである。伊豆西海岸は必ずしも石材に乏しいわけではないのに、わざわざ真鶴から得なければならなかった理由はどこにあるのか明かでないが、慶応二年から明治四年まで（一八六六―七一）五年近くの才月を費して竣工した横須賀製鉄所第一号船渠の内部表面は、伊豆、相模産の石材をもって築造し、その石材購入費だけでも実に一八三七〇両余で、一九三九八両余の開鑿土工請負費と大差のないことを示している。⁽¹⁸⁾ここでは横浜製鉄所船渠築造の場合のように石材斫出場所を明示していないが、相模と記されているところはおそらく旧知の足柄下郡以西の諸部落ではなかったろうか。

ニール号遭難記念碑は方錘形の基壇の上に、長目の四角錘を載せたような形のもので、高さは六米ほどである。上層下部正面の十字架とそれを中心とする荘飾は簡素であるが荘重で、また基底や上下両層の境目の屋蓋様のものの彫技にはすぐれた芸術感覚と巧緻さが見られ、全体の構造美もまことに見事である。明治初期の石造美術品として貴重な遺構といわなければならない。

要するにニール号遭難記念碑は明治九年ころ、遭難者の一人アントワース・リッショールニを雇庸していた草創期の横須賀造船所の仏蘭西技師たちの設営に成るものと考えられるが、これまで縷々述べ来たように、この事件には異常な関心が示され、日仏の当局のみならずわが官民は一体となってその処理に当たっていることが窺われるので、たとえ本記念碑が造船所の工場建築のような大規模なものではないにしても、その建設には愛惜の情をこめて十分な配慮がなされたであろうし、その建設資材の如きも、採石経験からその材質を知悉している相模地方にもとめられたであろうことを推察せしめ

るものがあるわけである。

五

明治元年(一八六八)八月十九日夜半榎本釜次郎の率いる八隻の艦船―開陽丸・回天丸・蟠竜丸・千代田形・神速丸・長鯨丸・美加保丸・咸臨丸―は品川沖を抜錨し、(ただし美加保丸・咸臨丸・千代田形はそれ
ぞれ開陽丸・回天丸・長鯨丸が曳航した)松島湾頭寒風沢を志して北上した。二十一日美加保丸は開陽丸の船尾につないだ綱がきれ、はげしい風浪に沖に漂うこと五昼夜、二十六日ついに銚子黒生海岸くろはえに坐礁沈没した。「玄蕃日記」⁽¹⁹⁾には「八月廿二日、雨天北風、四ツ頃より時化しけに成り八ツ頃風る」と見え、このころすでに暴風になっていたことが推測される。美加保丸は洋上で悪戦苦闘していたのであろう。さらに「廿七日、雨天北風、今朝蒸汽船壹艘黒生浦にて破船有^レ之。乗組人数も多分有^レ之由」と記されているので、二十六日夜の難波が翌朝になって発見されたものと思われる。なおこの件についての高崎藩の鎮将府に対する届出を左に録しておく。

高崎藩届書⁽²⁰⁾

右京亮領分下総国海上郡銚子陣屋詰役人共ヨリ用向有^レ之今晩用状相達候内去ル廿六日夜同郡飯沼村内黒生浦江何^レノ船トモ不^ニ相分^ニ難船一艘漂着ノ旨村役人ヨリ届出候間早速詰役人ノ者罷出様子杯相糺候処乗組ノ者何^レモ心体劳居リ言舌等聴ト不^ニ相分^ニ候得共徳川家臣ニテ船名美賀保丸ト相唱候旨申聞候然ル処風波荒ク人数高取調ハ勿論何分応接等モ不^ニ行届^ニ候ニ付一先引取猶此上風波沈静次第巨細相糺可^ニ申越^ニ一段申越候右者兼而御触達御座候脱走艦名之内ニ付急速御届仕候尤御触達之趣者早速彼地へ申遣候得共途中行違相成候儀ト奉^レ存候此段申上候以上

九月朔日

大河内右京亮家来

深井繁之助

一方咸臨丸も二十二日引綱が切断して回天丸と離れ、これまた風浪に翻弄され、二十九日ついに伊豆下田に漂着した。咸臨丸難航の次第は、小田原藩を脱藩して咸臨丸に乗組んだ関一郎（のち重鷹）の手記を引用して文倉文平氏がその著書⁽²¹⁾に詳細に伝えている。文倉氏の引用を要約すれば、二十二日東北風強く二本の檣を切断してようやく傾没を免れたが、二十三日洋上を漂流し、二十四日浪少しくおさまり常陸那珂湊の沖を通過するうち、またまた東北の強風大雨を加えて船さらに進まず、二十七日に至って晴れ、はじめて伊豆諸島を望見し、二十八日には御蔵三宅二島の間を流され、二十九日富士山を目当てに清水港へ進路をとったが、風に防げられて午後四時下田港へ流れ入ったというのである。

さて咸臨丸にはいささか目的を異にして乗船している、もと輪王寺宮の近侍の士奥野昌綱がいた。かれは宮をもとめて北上するのであるが、かれもまた咸臨丸の難航を伝えている。⁽²²⁾

戊辰のみだれに軍艦咸臨丸にて奥州^{おつしう}さしてはしり行きけるに八月二十一日鹿島灘^{かしまなだ}にて暴風雨にあい船は四十四の一度まで傾ふきてすでに覆没の理を極めみなく死を覚悟しけるほどにいざ辞世の歌をとて船べりにかきつけ、るうた

君がためなにかいとはむわたのはら八重の汐路^{しほぢ}のからきうき目も

これによって八月二十一日に鹿島灘で暴風雨にあったことがわかるが、「玄蕃日記」と照応していて面白い。ただここで「君がためなにかいとはむ」の君が天皇でもなく、徳川家の当主でもなく、実に奥野の旧主輪王寺宮公現法親王^(のち北白川宮能久親王)であることは一応留意すべき点であろう。

ところで咸臨丸の下田入港について下田町名主及び小田原軍監から、それぞれ左の如く鎮将府に届出があった。

下田町名主并小田原軍監ヨリ届書二通⁽²³⁾

今廿九日未下剋当港へ軍艦一艘致し入津し早速為見届町役人一人乗組罷出様子相伺候処徳川家咸臨丸^{カクリン}ニテ何方ニ於テ怪我有之候哉大破損ニテ檣等^{ホバシラ}モ切折レ蒸気等モ損シ候様子当港入ノ節モ一向煙リ等不^レ出煙筒等モ相見得不^レ申候何方ヨ

リ何方へ御通艦被_レ成候哉并乗組人数等伺申上候得共一向事實御答無_レ之唯艦名丈ケハ元徳川家軍艦俗事役ノ加藤保太郎ト申御方兼テ見知候故御同人ヨリ承リ申候香水百石急々御注文被_ニ御付_ニ候バツテラ等モ一艘モ無_ニ御座_ニ何方分怪敷奉_レ存候此段不_ニ取敢_ニ以_ニ飛脚_ニ御注進奉_ニ申上_ニ候以上

一筆啓上仕候然者自_ニ下田表_ニ別紙之通注進申越候定而脱走乗込於_ニ何方_ニ歟敗軍候舟ト奉_レ存候仍而不_ニ取敢_ニ豆州松下兵隊ノ内二十人余当城ヨリ三十人下田表へ繰出成丈揚陸セシメ可_ニ討取_ニ手配仕候若又不_レ可_レ討儀モ御座候ハ、当所ハ最早繰出候事ニ付早々御申越可_レ被_ニ成下_ニ候以上

八月晦日

安永 又吉

大村益次郎殿

吉村長兵衛殿

右二通の届書のうち、下田町名主よりのものには「何分怪敷奉_レ存候間此段不_ニ取敢_ニ以_ニ飛脚_ニ御注進奉_ニ申上_ニ候」と見え、小田原軍監よりのものには「定而脱走乗込於_ニ何方_ニ歟敗軍候舟ト奉_レ存候……成丈揚陸セシメ可_ニ討取_ニ手配仕候」と記し、下田町名主と小田原軍監との間に咸臨丸自体の動静に対する認識とともに、職務上からとはいえそれに対処せんとする姿勢に大なる径庭のあることを見逃し得ない。

なお鎮将府は増田虎之助、石井富之助の両名に、軍監安永又吉、中島四郎と協議の上本件を処理することを命じ、翔鶴丸に下田港を警備させ、さらに帰国途上の肥前藩の藩兵を下田に上陸させて警戒に当らせている。⁽²⁴⁾

鎮将府はまた九月十日脱艦追捕のため増田、石井、中島に白尾采女を加えて清水港に遣わし、同時に富士山丸・飛竜丸・武蔵丸の三隻に阿波柳川両藩の藩兵各三十ずつを塔乗させ清水港へ向わせた。

結局咸臨丸は九月十八日に下田港で拿捕された。

六

輪王寺宮は五月十五日の彰義隊潰滅後所々に潜伏し、ついに数名の従者とともに軍艦朝陽丸に乗って二十八日常陸平潟に上陸し、会津に入り、さらに六月十八日米沢に移り、二十八日仙台に転じ同地仙岳院に滞留した。

奥野昌綱は仙台に入った輪王寺宮を慕って海路これに赴かんとし、奔走の結果八月十日榎本釜次郎麾下の咸臨丸(すでに機はつていた)に乗り込むこととなった次第である。かくして鹿島灘で暴風雨に遭遇し、八月二十九日伊豆下田に漂着したことはすでに記した通りである。

さて奥野ら七名は翌朝ひそかに上陸し、その夜は蓮台寺の温泉場に宿泊、九月朔日小杉原峠(現在釜沙羅峠という)を越えて松崎にいたり船宿に入り、翌早朝便船をもとめて海上十八里無事清水港に着いた。翌三日久能山に逃れ目代杉江甲子次郎方に一泊、四日静岡に出て川鍋村の松竜院に身を寄せてそこに潜伏した。

かかる間に咸臨丸も下田から清水に入港、十七日官軍の軍艦富士山丸・飛竜丸・武蔵丸の三隻がこれを砲撃し、副船将春山弁蔵以下長谷川得蔵・長谷川清四郎・春山鉾平・加藤常次郎・今井幾之助その他悉く壮烈な死を遂げた。

この打払いのことを聞いて奥野らはさらに菩提樹院に移り、また脱走者探索の風聞があったので奥野兄弟は二十五日菩提樹院を出て陸路東上十月二十九日に二ヶ月ぶり再び故郷の人となった。

輪王寺宮は奥羽平定後京都に送還されることになり、十月十二日藤堂高潔(たかよし)に警固されて仙台を發し、十一月四日江戸に入り即日上海の途に上り、仲仙道を経て十九日入京生家伏見宮家に屏居した。宮は翌年九月屏居を赦され、生家に復歸さるに翌三年十一月能久(よしか)の旧名に復することになった。

奥野は明治三年（一八七〇）ころから新生の第一步を踏み出す機会に恵まれたようである。同年ヘボン（J. C. Hepburn）がラウリーに宛てた手紙に「わたしは一カ月約八ドルで翻訳の原稿を筆写するために、一人の日本人をやとわなければなりません。この金は聖書協会から支出するだろうと思っておりますが、如可でしょうか」と記されているが、ここに一人の日本人というのは奥野昌綱である。ただヘボンのもとめたのは聖書翻訳の原稿の筆写の仕事ばかりでなく、同じ手紙のなかに「ルカ伝は半ば翻訳しました。マタイ伝、マルコ伝、ヨハネ伝を終わりましたのでそれらの審査をしてもらうため、同労の宣教師に送る必要から、目下写しを作っております」と見えているので、むしろ日本語教師、翻訳助手としての仕事ではなかったらうかと思う。奥野は四年春ころ、その女婿近藤周興の知人小川廉之助（義経）を介して、ヘボンと相知るに至った。この小川義経は文久三年（一八六三）から米国宣教師日本語教師となり、慶応元年（一八六五）からは米国長老教会宣教師デヴィッド・タムソン（David Thompson）の日本語教師として、その「約百記」翻訳の助手を勤め、これが機縁となって基督教信徒となり、明治二年にタムソンから洗礼を受け、五年には日本最初の教会たる日本基督公会の設立に際し、最初の長老に推され、また十年按手札を受け奥野昌綱・戸田忠厚とともに基督教教師となった人である。

ところで奥野の再生がかれの詩文における才能（奥野昌綱先生略伝並歌集に十分うかがわれる）を聖書の日本語訳に生かすという形ではじめられたことは興味ある事実であり、奥野はヘボンを助けて馬可伝と約翰伝を翻訳し、この両福音書はのちブラウンの校訂を経て明治五年横浜で刊行された。またヘボンがタムソン・バラ両師の助力を得て訳出した馬太伝は奥野が文章を整え、翌年横浜米国聖書会社から発行された。

さて「新東洋の建設者」と題してブラウンの伝記を書いたグリフィスは奥野の当時の心境について次のように記している。

「はじめの六ヶ月間、奥野はときおり讚歎の色をあらわすほか、格別の関心を有せざるものの如くであったが、明治五

年初夏のころから強い信念にめざめ、聖書を読み行くままに受ける感銘に適切な表現を与えるため、屢々翻訳を休止せざるを得なかった。そして遂に受洗を願ひ出づるに至った。(二五四頁)

奥野は事実明治五年七月一日、横浜日本基督公会でブラウンから洗礼を受けた。奥野の受洗は全国を通じて第二十七人目である。時に年齒まさに五十、志の崇くして壮なることまことに驚くの外はない。

かれは十年十月三日には按手礼を受け教師に任ぜられた。実に日本人教師の嚆矢である。これよりあるいは教会牧師、講義所主任としてあるいは全国巡回伝道の旅に壯者を凌ぐ活躍が続くのである。

筆者は咸臨丸下田漂着の事件に関連して、明治という転換期に見事な転向を遂げて新時代に生きた奥野昌綱の姿を素描したが、ここにかれの伝道活動の一齣として写し出さなければならぬのが武州和戸教会である。

さて和戸教会の指導的地位にあったのは小島九右衛門と小菅幸之助で、両者はいずれも横浜海岸教会の後身日本基督公会で重きをなした人物である。とくに小菅は和戸の宮大工の出身で、明治七年から八年にかけて横浜のフェリス女学校(現フェリス学院)の校舎の建築―いわゆる擬洋風建築―に当たったいささか変った経歴の持主であるが、しかしこういったような多彩な活動は転換期の人物に往々見受けられる傾向で敢て異とするに足りない。筆者はさらに進んで奥野昌綱と和戸教会、明治初期における洋風建築の発達の経路などについて小考を重ねたいと思う。

注

(1) 「史学」三六ノ二・三(「松本芳夫先生古稀記念号」所収) 参照

(2) 本資料は明治七年(一八七四)三月二十日、南伊豆入間の海岸で難破沈没した仏蘭西郵船ニール号の始末記とでもいったようなもので、筆者が昨年暮入間の外岡信利氏所蔵の僅

底から発見したものである。

ただ本始末記は事件当時の入間村戸長外岡文平氏の筆録したものではなく、つぎの誠一郎氏の代に三坂村長の依頼によって書かれたので、おそらく先代の残した旧記に依拠したものであろうと思う。

なお文平氏は明治三十年(一八七六)に死去し、外岡家は誠一郎氏の代になっており、また黒田福治郎氏の村長在職期間は明治四十三年(一九一〇)八月から四十五年一月までであるから、始末記がその間に成ったものであることはいふまでもない。本文に事件から三十余年を経過しているといっている通りである。いずれにしても始末記の原資料とともに仏蘭西公使館、足柄県庁関係の原資料が失われているのはまことに遺憾である。しかし本始末記は外国船の遭難という稀有の出来事に関するものであるだけに、文字通りその始末の経緯については注目すべきもの多く、ここに煩をいとわず全文を掲げて参考に供する次第である。

時ハ明治七年季ハ陽春三月廿一日ノ払曉某士柴門ヲ叩イテ曰ク嗚呼憐ム可シ彼ノ白色人種一名シャツ一枚ヲ着シテ我入間区海浜ニ漂蕩スト吾人ノ嚴父外岡文平方今乏シキヲ戸長ニ享ケル者之ヲ耳朶ニシテ大ニ驚愕斜ナラズ即チ往イテ彼ニ接シ其ノ事由ヲ問ハント欲スレドモ維新已来年ヲ閱スル未ダ七歳東西洋ヲ異ニスル者敢テ言語ノ通ズルナシ彼レ漸ク手ヲ以テ遭難ノ状ヲ示シ風浪高キ処断崖ヲ攀デテ漸ク此ニ漂蕩シタル所以ヲ説ク戸長始メテ其ノ懸状ヲ想ヒ同人ヲ自宅ニ伴ヒ来リテ充分ナル保護ヲ与ヘ然ル后自カラ人夫ヲ引率シテ海岸ヲ巡檢スレバ当地先海面三ツ石ノ内白根近辺ニ汽船ノマスト二本傾摧シテ罔々漂々タルヲ認メ歩一歩ヲ重子テ漸ク字御手浜ニ至リ二人ノ屍体ヲ發見ス一ツハ

清國人一ツハ仏人ナリ戸長即チ人夫ニ命ジテ之レヲ前浜ニ廻送シ樽中ニ詰メテ以テ脚夫ヲ足柄県庁ニ派シ其ノ所以ヲ届出スレバ異邦人ノ遭難大ニ等閑ニ付スベカラザル旨ヲ以テ県令柏木忠俊殿属十名ヲ伴ヒ拙宅ニ出張其ノ救済業務ニ敏タリ爾来短艇ニ搭ジテ隣佑妻良村吉田海浜ニ漕ギ寄セタル三人ノ遭難者ハ同地人民ノ厚キ保護ニ依リテ九死ノ中ニ一生ヲ得タリ之レ亦拙宅ニ收容シ都合四人ノ生存者ヲ得タリ

以上四名ノ生存者中一人ハ商人ニシテ姓名ヲ(ジョン)ト呼ビ他ノ三人ハ水夫也吾人ノ嚴父ハ直チニ(ジョン)氏ニ袖ノ衣服一重ヲ他人ニ木綿衣二枚宛ツヲ与ヘテ防寒ニ供ス彼ノ(ジョン)氏ハ曩ニ吾ガ横浜市ニ於テ商行為ヲ営ミ拾年間同地ニ寄留セシ人タルヲ以テ幾分カ日本語ニ通ジ同人ノ談ズル処ニ依リテ其ノ概梗ヲ知ルヲ得タリ

故ヲ以テ今同人ノ談ニ依リテ得タル話柄ノ記憶ニ存スル者ヲ列挙シテ紹介セン歟

(ジョン)氏ハ明治六年九月一タビ本国仏蘭西ニ帰省シ明七年妻子ト共ニ相携ヘテ同国郵船爾伊兒ニ搭乘シ再ビ横浜ニ渡航セントシテ終ニ此ノ難事ニ遭遇シ最親最愛ノ妻子ト幽明界ヲ異ニスルノ悲境ニ沈淪シタルカ

此ノ遭難船爾伊兒ノ乗組員并ニ乘客ハ都テ員数六十四名ナリト

此ノ顛末ヲ聴聞シタル柏木県令ハ外務省ニ向ツテ直チニ

其ノ旨ヲ報ズルヤ同省官吏及仏國領事主張ス其當時長官ラシキ者二名軍人四名軍艦ニ搭乘当浜ニ着シ県令ニ諸般ノ事ヲ委托シテ横浜港ニ帰航セリ

足柄柏木県令モ亦万事取調ノ上同県属前田甲竜折原直敬ノ両氏ニ托シテ以テ帰庁ス

爾來溺死者ハ近県神奈川県馬入及本県下戸田村等ヨリモ廻送シ來タリ都合三十一人当村海蔵寺共同墓地ニ埋葬ス

此ノ溺死者中支那人十一名西洋人二十名ニシテ多クハ面部腐敗シテ其ノ何人タルヲ認識スルコト不能只三月二十一日ノ朝漂着シタル一人之レハ我が海軍省ノ雇聘ニ係ル横須賀造船所技師ト判明シタルノミニシテ他ハ同船キヤプテン死亡ニ付營々携帯品及衣服ノ粗美ニ依リ彼レハセントルマン彼レハ水夫ト想像スルニ止マリタリキ

此ノ溺死者ノ携帯品并ニ難破船積荷ハ県属前田氏取調乃上尽ク神奈川県庁へ廻送ス其ノ後前記県属折原直敬氏ハ依命帰庁残務ハ前田県属及ビ我親父外岡文平ニ依托ス

其ノ後仏國公使館ヨリ同船難破救恤ニ対シ県庁及ビ前田甲竜戸長外岡文平ニ賞状下附セラレタリ然レドモ其ノ書類ニ至リテハ今ヲ去ル三十有余年ノ昔ナレバ何処ニ藏存シアル哉目今搜索中也

此ノ当時屢々藤花ニ似タル徽章ヲ負フタル帽子ヲ戴ケル人士本村ヲ巡回シタレドモ其ノ何ノ所以タルヲ知ラズ尚溺死者埋葬ノ事ニ就テハ里中海蔵寺住職北邨讓山氏モ大ニ尽

カシタリキ

尚県属前田甲竜氏ハ五月五日諸般ノ事務ヲ了シテ帰庁シ其ノ残務ハ第五大区九小区副区長山本謙吾殿并ニ当村戸長外岡文平ニ依托ス今其ノ文章ヲ左ニ描写ス

一、仏國郵船爾爾伊兒破船ニ付是レ迄出張イタシ候処方今流れ寄りノ品モ無之一先ヅ引払ヒ候間向後諸事不取締無之様厚ク注意イタサレベキコト

一、右沈船ニ付外國人亦ハ諸向官員等出張御用有之候ハバ早々注申有之ベキコト

一、積荷船具船櫓或ハ死体流れ寄り候ラハバ委細檢分ノ上早々申越サル可キコト

右相達候也

明治七年五月五日足柄県權中属前田甲竜印

第五大区九小区副区長

山本謙吾殿

入間村戸長外岡文平殿

右ノ書類ハ今尚拙宅ニ存ス其ノ後記念碑ノ設立ニ際シ西洋人一名外通訳官一名本村ニ出張其ノ工事ニ着手セリ其ノ記念碑并ニ吊魂碑ノ模形ハ別紙ニ描写ス乞フ之レヲ觀覽セヨ

右ノ顛末ハ当三坂村長黒田福治郎君ヨリ拙者へ親父ノ取扱ヒタル事柄ニ付宜敷探鞠調査煩シタキ旨依頼セラレタルヲ以テ不肖ヲ省ミズ茲ニ事由ノ梗概ヲ陳述スルノ光榮ヲ得

タリ尚貴氏及アールローレン氏当地ニ賁臨セラル、アラバ
応分ノ勞ヲ執ラント欲ス然レドモ当地ハ岳南半島ノ南端ニ
位スル最モ僻陋ノ寒村ナレバ是非共豫メ報アラントヲ希
望ス

- (3) 余輩素ヨリ振天ノ才ニ乏シ其ノ記スル所或ハ之レヲ解ス
ルニ苦ムノ節多カラン希クハ之レヲ諒トセヨ慙颯々々
堀越三郎「旧家依田氏の屋敷」(「工學院大學研究報告」一五)参照
山崎 弘「裏面はつぎのように読まれる。」

(4) 奉勸請十方三世一切諸仏諸尊菩薩諸天善神堅牢地神尊天
奉納觀音普門品巻軸 諸難不起諸魔退散

奉転読大般若經六百卷家門長久子孫繁栄如意安全祈所
保高敬白

奉修般若理趣分巻座 福寿延長諸縁吉利

奉勸請惣日本国内大小諸神祇般若会上十六善神

- (5) 柳田国男「風位考」(定本「柳田国男集」第二十卷所収) 参照

- (6) 御上洛覚書

文久三亥年十二月廿七日江戸御出船

將軍家茂公様軍艦にて御上洛被遊候に付極月廿六日浦賀
御奉行所より御達し有之地方は御代官江川太郎左衛門様御
掛り浦手は浦賀御奉行所様御掛りにて下田町へ三ヶ村役人
衆立寄番舟役舟御雇舟等用意致し待居候所へ浦賀より押送
り形御船式艘へ同御組与力松村源八様同組同心衆乗組着い
たし候処浦賀湊へも御立寄被遊候よし同廿九日八ッ時頃よ

り下田湊へ御召軍艦外御軍艦追々御入船被遊候処直様御上
陸被遊御本陣海善寺へ御立寄被遊暮六ッ時より御乗船被
遊候右御同勢三百五拾人余同夜四ッ時被仰出候は明卅日朝
五ッ時柿崎玉泉寺へ御立寄夫より地引網御上覽可被遊由御
達し有之に付同卅日早朝より仕度致し候内惣御同勢御役々
様方御上陸被遊其節舟着場の役に相成上様御座船の舷に手
を掛アイビヲ警固仕候加役を相勤直々將軍様奉拝顔尚又御
道具迄取調其上玉泉寺迄御供に附添参り申候誠に冥加に叶
有難事に御座候同寺に暫御小休被遊候内御上様へ当村名主
平右衛門より御菓子奉献上度由御近習衆へ御伺候処御取次
被下早速相叶奉献上目出度御納白銀代として金三分御下げ
被下有難奉頂戴候よし夫より御貝役様方兩人門より外へ向
御貝式度御吹被成候得ば御出立に相成間戸浜御上覽御小屋
へ御被為入御附御老中様方惣役々様方左右に并其外を御鉄
砲方にて相固網子共大勢懸声にて渚迄網引上候得ば御上様
御喜人波打岸迄御被為進候得ば網子半切に大鯛活候得ば御
老中様方御側の面々後に附添立並び活鯛御覽被遊又々御小
屋に被為入柿崎村役人共を呼被出候へば浜中へ御近習衆兩
人封金を盆に乗上様御目通りにて御下被下有難奉頂戴候後
にて承り候得ば白銀代として金五両のよし其より御出立に
相成武ヶ浜磯辺にて御釣被遊漸く下田御本陣へ被為御入
候其節須崎柿崎の老若男女道の左右に居り手を下げ頭を上
而奉御拝顔様被仰誠有難御事に候同夜海善寺にて御年取の

用意被出仰御軍艦の御役々様方も不殘御上陸被遊下田町にて御年取に相成申候元朝御肴鯛兎迄も御調申候よし

明子年元日日出度御祝儀も相済候よし同日武ヶ浜御見分被為有夫より下田石山へ御越被遊候は先年一ッ橋大納言様御見分有之に付右石山御覽被遊候由夫より仮御本陣へ御引取に相成暮六ッ時より御乗船被遊候処へ江川篤之丞様御着早船にて御召軍艦迄御出被成候処早々御用済に相成御引取被成候よし同日朝五ッ時順風に相成御召軍艦外に軍艦壹艘目出度御出船被遊候処同日夕方より西風強く相成御召軍艦は小浦湊へ御入船被遊壹艘は田下へ走戻し申候に付江川篤之丞様同三日早朝より小浦迄御越被成候後にて承候得ば浦小へも御上陸被遊候由同四日順風にて小浦湊より目出度御出船下田湊の御軍艦も追々目出度御出船被遊候

御道具の覚

- 一 紫縮緬袋入 御守刀と相見へ申候 壹腰
- 一 黒羅紗袋入 御長刀 壹振
- 一 銀ノ唄口金ノ御紋散赤太緒 御具 壹対
- 一 黒天鷲絨桐衣白縮緬御紋付御茶瓶 壹荷
- 一 御小箱 式夕組
- 一 御紋付 御排灯箱 壹棹
- 一 白木 御簞笥 壹ツ
- 一 紫縮緬上包 御菓籠 壹ツ

- 一 虎ノ皮ニ毛氈 御敷物
- 一 劔付 御鉄砲 五拾挺余

御軍艦の名

- 御召軍艦 翔鶴丸 蒸氣順動丸 同觀光丸 同大鳳丸
- 同蟠竜丸 同八雲丸 同セイラ船 広運丸 千種丸 千代田丸
- 拾艘
- 外二三艘 内蒸氣船壹艘追て入津出帆仕候

浦賀押送形 御船式艘 御座舟 明星丸小嵐丸
亥年十二月廿七日着 子年正月五日西風ニ相成出帆

浦賀御奉行所様御組与力松村源八様

同心衆御三人

地方御掛り 御代官 江戸篤之丞様

惣御同勢

須崎村 名主 重郎右衛門代

年寄 平左衛門

同 孫左衛門

同 治郎左衛門

同 伝兵衛

百姓代 又四郎

漁舟頭 仁右衛門

加役 五右衛門

同 六兵衛

右者あら増書印置申候

元治元年子六月吉日

田中六兵衛写

- (7) 「横須賀海軍船廠史」(第一卷) 七六頁
- (8) 前掲書 九八頁
- (9) 前掲書 一二六・一二九頁
- (10) 前掲書 一五六頁
- (11) 前掲書 一八八頁
- (12) 前掲書 二四六・七頁
- (13) 前掲書 五八・六一頁
- (14) 前掲書 七一頁
- (15) 前掲書 一五頁
- (16) 村松貞次郎著「日本建築技術史」、「日本建築近代化過程の技術史的究研」(「東京大学生産技術研究所報告」一〇・七) 参照
- (17) 「横須賀海軍船廠史(第一卷) 三五―六頁
- (18) 前掲書 八三、四頁 一七四、五頁
- (19) 田中家は銚子の生んだ豪商で、「玄蕃日記」はその十世貞矩十一世憲章(ともに玄蕃といった)が文化九年(一八二二)から明治五年(一八七二)まで六十一年間にわたって書き記した五十五冊に及ぶ龐大な日記で、氣象にはじまり家事関係社会事象まで書きとめており、地方庶民史料として貴重なもの

である。

- (20) 「鎮将府日誌」(第十一) 所収
- (21) 「幕末軍艦咸臨丸」(三七二―三頁) 参照
- (22) 黒田惟信編「奥野昌綱先生略伝並歌集」(第壹編「露のしら玉」) 二四六頁
- (23) 「鎮将府日誌」(第十一) 所収
- (24) 前掲書(第十五所収関係事項) 参照
- (25) 高谷道男編訳「ヘボン書簡集」二二三頁
- (26) 前掲書 二二―二頁
- (72) Griffith, William Elliot, A Maker of the New Orient, Samuel Robbins Brown, Pioneer, Educator in China, America and Japan; The Story of his life and work. N. Y, 1902.